

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第94号

2025年3月

日本薬史学会2025年度の主要行事のご案内

編集委員長 齋藤充生

来年度の日本薬史学会の日程について1月23日の常任理事会時点の情報をお知らせいたします。コロナの状況等により日程変更の可能性がありますので、最新情報・詳細は学会HPでご確認ください。多数の会員のご参加をお待ち申し上げます。

1. 日本薬史学会総会・公開講演会の開催日について

開催日：2025年4月19日(土) (予定)

会場：東京大学大学院薬学系総合研究棟

1) 12:30 - 13:30 理事・評議員会(10階大会議室)

2) 14:00 - 15:20 総会(2階講堂)

3) 15:30 - 17:40 公開講演会(同上)

○長野哲雄先生

(東京大学名誉教授)

「東大模範薬局はどこにあったのか? - 東大薬ブラタモリ -」

○森本和滋先生

(国立医薬品食品衛生研究所客員研究員、長崎大学)

国際保健医療福祉学研究分野(原研国際)客員教授
「医療系学生のための倫理教材の開発25年の歩み - 使命感と責任感の醸成 -」

費用：公開講演会(非会員も参加できます)は資料代500円を当日お支払いください。懇親会の予定はありません。

日本薬剤師研修センター：1単位

2. 柴田フォーラムの開催日について

未定：コロナの状況を見て対面開催を予定。

会場：東京大学(予定)

3. 日本薬史学会2025年会(静岡)の開催日について

日時：2025年10月4日(土)

年会長：桐原正之(静岡理工科大学教授)

会場：静岡理工科大学静岡駅前キャンパス4F
(JR静岡駅北口から徒歩3分)

詳細は本紙記事をご覧ください。

日本薬史学会2024年会の報告

2024年会長 厚味巖一(帝京大学薬学部)

秋雨前線の影響であいにくの雨となり肌寒さも感じた2024年11月2日(土)に、東京都板橋区にある

帝京大学板橋キャンパスにおいて、テーマを開催地の「板橋」にちなんで「未来へと橋を渡す」として日

本薬史学会2024年会を開催いたしました。日本薬史学会が創立70周年を迎えた記念の年であり、久々の対面での東京開催ということも相まって、参加者は124名(うち日本薬史学会会員47名)と盛会になりました。参加者には、西川隆先生がご執筆され、薬事日報の1月1日号に掲載された「日本薬史学会誕生の時代背景」を配布するとともに、会場前方の掲示に「創立70周年記念」と記載させていただきました。翌3日(日)は好天に恵まれ、都内の中心部をバスでめぐる薬史ツアーを実施いたしました。27名にご参加いただき、8時過ぎから16時過ぎまで楽しい時間を過ごすことができました。

このように無事に本年会を開催でき、学生(35名)や薬剤師など多くの方々にご参加いただくことが出来たのも、学会役員の皆様、共催や後援いただいた諸団体の皆様、ご寄付や広告料などをいただいた方々、実行委員会の先生方やお手伝いいただいた学生など、多くの方々のお力添えがあったのことで考えております。この紙面をお借りいたしまして、深く感謝の意を表します。誠にありがとうございます。

学会報告

特別講演では、帝京大学名誉教授の木下武司先生が「平安の薫物“侍従”に配合される熟鬱金について」というタイトルで、平安時代の香料としての熟鬱金とはいったい何かを多くの史料を基にご紹介くださいました。また、順天堂大学名誉教授の樋野興夫先生は、「がん患者を支えるために～がん哲学から～」



というタイトルで、聴衆とのやり取りを通して、がん患者になるということについて考える機会を与えてくださいました。樋野先生のご講演は、公開講演として、会場の隣にある帝京大学医学部附属病院に通院なさっている患者さんを始め、一般の方々にもご参加いただきました。

一般講演は、8題の口頭発表と、ショートトークを含めた8題のポスター発表が行われ、活発な議論で盛り上がりました。学会にご参加いただいた方々からの投票によって、二松学舎大学文学研究科の大学院生である山形悠さんの「東洋医薬協会と朝鮮の漢方復興運動」が最優秀発表賞に、近畿大学薬学部の学生の坂東桜羽さんの「近畿大学所蔵のペニック標本の調査研究」と横浜薬科大学の武田収功先生の「“天岩戸”神話と大麻の科学」が優秀発表賞に選出されました。

お昼の時間には、株式会社サエラで薬剤師としてご活躍の宮本啓悟先生から、「サエラ薬局穴水店が地域に根ざした薬局に成長するための道のりと能登半島地震の復興支援について」というタイトルで、地方での地域医療を支えるべく、薬局がどのように歩み、さらにはこのたびの震災でその地域との絆がいかされたことについて、ランチョンセミナーとしてご講演いただきました。なお、当日会場にて募金を呼びかけたところ、13,500円が集まりましたので、日本赤十字社を通して令和6年能登半島地震災害義援金として寄付したことを申し添えておきます。

夕方には、「食品と薬の歴史から学ぶ」というテーマで、帝京大学文化財研究所の中山誠二先生から「納豆の起源解明に向けた考古学的研究」、株式会社明治の山田成臣先生から「乳酸菌の歴史とその機能の可能性」、日本血液製剤機構の柚木幹弘先生から「血漿分画製剤の過去・現在・未来」、国立医薬品食品衛生研究所の井上貴雄先生から「躍動する核酸医薬：試行錯誤の歴史を交えながら」と、各先生から食べ物と薬を歴史の流れの中で捉える大変興味深いお話をご講演いただきました。

19時からは、帝京大学板橋キャンパス1階の食堂にて、38名にご参加いただき、情報交換会を実施いたしました。日本薬史学会会長の船山信次先生



にごあいさつをいただき、日本薬史学会前会長で監事の森本和滋先生の乾杯の御発声とともに歓談を開始し、1時間を過ぎても話が尽きない交流の場となりました。

薬史ツアー

東京駅と御茶ノ水駅のいずれかに集合し、バスに乗車してまずは小石川植物園に向かいました。雨上がりの抜けるような青空の下で2時間弱ではありましたが、実行委員長の山岡法子先生のミニレクチャーを交えながら、広大な植物園の中を探索し、

都心とは思えない緑と鳥の声に囲まれた豊かな時間を過ごすことが出来ました。バスで次に東京大学の健康と医学の博物館へと向かい、本郷キャンパス内を少しですが歩いた後に、博物館にて医学の歩みを現代の医学の状況とともにパネル展示で知ることができました。次には、皇居外苑の楠木正成の騎馬像の前にある楠公レストハウスでお重をいただきました。珍しい調味料などもあり、お昼を過ぎた1時近くになっており空腹を覚えていましたが、十分満たされました。さらに、菊のご紋が付いたお土産のお箸もいただき、午後からの活力を得ることが出来ました。そして、国会にて衆議院を参観いたしました。ちょうど新たな議員が決まった直後であり、氏名標とよばれる議事場の議席の前に立っている名札の入れ替え作業が行われている珍しい時期でした。緊張しつつも目の前には報道で見るとなじみの風景が広がっており、やや興奮いたしました。最後には、皇居の北の丸公園にある科学技術館を訪れました。大変にぎわっており、短い時間でしたが子供連れに交じって様々な体験を行う事が出来ました。16時過ぎに東京駅や御茶ノ水駅で解散となり、とても濃厚な時間を過ごしご満足いただけた様子で各自が帰宅の途につきました。



日本薬史学会2025年会のご案内

日本薬史学会2025年会(静岡)

年会長 桐原正之

日本薬史学会2025年会の年会長を務めさせていただきます、静岡理工科大学教授の桐原正之でございます。

このたび、静岡県で初めての開催となる薬史学会年會を主催する機会を頂き、大変光栄に存じます。

2025年会は、静岡駅前新たにオープンした静岡理科大学静岡駅前キャンパスビル4階を会場として、10月4日(土)に開催いたします。翌10月5日(日)には、「薬史ツアー」を実施し、徳川家康公終焉の地としても知られる久能山東照宮(静岡市)や、徳川家康ゆかりの可睡斎(袋井市)、薬と信仰が融合した医王山油山寺(静岡県袋井市)、そして歴史ある袋井市の澤野医院記念館等を巡る予定です。

静岡は、薬史においても重要な位置を占める地です。最後の住みかとして静岡を選んだ徳川家康公は「薬マニア」として知られ、自らの健康管理に薬を取り入れていた人物であり、その生涯における薬との関わりは、今日の薬史研究においても興味深いテーマとなっています。このような静岡県での開催が、薬史研究に新たな視点をもたらす場となることを願っております。

本年会では、口頭発表およびポスター発表を予定しております。多くの会員の皆様からのご発表を心よりお待ちしております。また、特別講演やシンポジウムについても現在計画中であり、決定次第、詳細をお知らせいたします。

さらに、懇親会の開催も計画しており、参加者同士の交流を深める機会となるよう準備を進めております。具体的な内容や場所については、追ってご案内いたします。

翌日の薬史ツアーでは、歴史的な意義を持つ名所を訪ね、薬史に触れる貴重な体験を提供する予定です。久能山東照宮や可睡斎では徳川家康公にまつわる遺品に思いを馳せ、医王山油山寺では薬にまつわる信仰文化を感じていただけることでしょう。また、澤野医院記念館では、日本の地域医療と薬の歴史を学ぶ機会を提供いたします。

参加申込みや発表募集の詳細は、今後日本薬史学

日本薬史学会主催
日本薬史学会2025年会(静岡)

◇学会 開催年月日 令和7年10月4日(土)
会場：静岡理科大学静岡駅前キャンパス4F
アクセス：JR静岡駅北口から徒歩3分

◇薬史ツアー 開催年月日 令和7年10月5日(日)
久能山東照宮 / 秋葉総本殿可睡斎 /
医王山薬王院油山寺 / 袋井市澤野医院記念館を予定

日本薬史学会2025年会(静岡)
実行委員会メンバー及び事務局

- ・ 年会長
桐原正之(静岡理科大学理工学部教授)
e-mail: kirihara.masayuki@sist.ac.jp
- ・ 実行委員
小土橋陽平(静岡理科大学理工学部准教授)
- ・ 実行委員
鎌田昂(静岡理科大学理工学部准教授)
- ・ 大会事務局
静岡理科大学・桐原研究室内
日本薬史学会2025年会(静岡)事務局
〒437-8555
静岡県袋井市豊沢2200-2
TEL 0538-45-0166 FAX 0538-45-0110

会のホームページにてご案内する予定です。最新情報を随時更新いたしますので、ご確認ください。

静岡の豊かな自然と歴史の中で、薬史研究の新たな展開について語り合える機会となることを願っております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本薬史学会賞を受賞して

理事 小清水 敏昌

この度は、「『薬学史入門』の企画・編纂に対する功績」との事で、2024年度の伝統ある「日本薬史学

会賞」を戴きました。誠に有難うございます。推薦して下さった関係各位に感謝申し上げます。本書の

企画、編纂に携わった多くの関係者を代表して私が戴いたと解釈しており、厚くお礼申し上げます。

本書が出版されるまでには、本書の編集委員4名、編集アドバイザー2名の委員会関係者がおり、更に執筆者は私を含み計25名の努力によって、スタートしてから約3年半後の2022年11月に出版することができました。

本書の編集経過については、時々薬史レターにご報告させて頂きました。最初に編集委員会が組織され検討が始まったのは2019年5月で、第1回の編集委員会が開催されました。その後、ほぼ2か月に1回の割合で委員会活動を進め、本書にどのような薬学史上の項目を載せるか等、内容の検討は何回も

議論を重ねました。しかし、順調に行くと思われた委員会活動でしたが、コロナ感染状況から突然2020年4月7日に政府により緊急事態宣言が発令されました。このため不要不急の外出は控えるようになり、委員会活動が停滞してしまいました。その結果、編集上の連絡や執筆者との確認などがなかなか進まず大幅に遅れることとなりました。今後は、この初の薬学史のテキストが、多くの薬科大学や教育関係者の間で取り上げられ、薬学生や一般の人たちに参考となることを期待しています。

これからも薬史学会の発展のために努力していきたいと思います。

ありがとうございました。

日本薬史学会奨励賞を受賞して

近畿大学 高浦 佳代子

このたび、2023年度日本薬史学会奨励賞を賜りました。こうした大きな賞を頂くのは初めてのことで、身に余る光栄です。また、このような榮譽ある賞にご推薦、ご選出くださいました先生方に厚く御礼申し上げます。

子供のころから日本史と薬の双方に興味があり、資格の取得ができることなどを加味して大阪大学の薬学部に進学しました。その時には、歴史は趣味でやっていこうと思っておりましたが、高橋京子先生の研究室で古い生薬標本を扱えるというお話を伺い、研究室のメンバーに入れていただきました。先生が総合学術博物館のご所属であったこともあり、文系の先生方ともお話をする機会を得ることもできました。今回賞を頂きました緒方洪庵関連の研究も、高橋先生のご指導と、こうした環境あって可能となったものです。また、関連研究の中で最も印象に残っているのはミュオンビームを使用した非破壊分析ですが、こちらも文化財分野や素粒子分野といっ

た、薬学の世界ではあまり触れることのない領域の先生方と協力して行った研究でした。研究を進め、まとめていく中で、それぞれの分野特有の考え方に触れ、多様な観点・考え方に対応する柔軟性が培われていったように思います。分野を超えた学際的研究というのが現在重要視されつつありますが、そうした流れの中で本当に貴重な経験をさせていただいた、と感謝してもしきれない気持ちでおります。

歴史研究は薬学や理系の世界の中ではまだまだご理解・ご評価頂けることが少なく、古いものを振り返ることに何の意味があるのか、とご質問を頂くことも多々あります。ただ興味を満たすためだけのものではなく、前述のような様々な分野の先生方と協力しながら研究を進め、現代の医療や社会に還元可能な価値創成が可能であるというところを示していく必要があると考えております。これからは、さらに自分の研究領域を開拓していけるよう、邁進していく所存です。

【献本のお知らせ】

薬史学雑誌57(2)に掲載された「鑑真和上の功績を広めるために造園された唐招提寺薬園の歴史とその再興」(西原正和)の転載許諾のご縁で、「鑑真和上にお礼をする会」より、薬園で栽培されている薬草の写真、栽培法、利用法などを収載した『唐招提寺 薬草園復興2版』を献本いただきました。

「授賞題目：漢方薬の原料として使用される生薬に関する薬史学研究」について

名古屋市立大学大学院薬学研究科生薬学分野 牧野利明

この度、日本薬史学会から奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。今回受賞対象となったのは、2023年3月の薬史レター第90号で紹介した生薬ハンゲの修治に関する研究¹⁾のほか、原著論文17本、総説論文2本です。今回はまだ薬史学会では紹介していない、生薬の効能の標準化案作成に関する研究^{2,3)}を紹介させていただきます。

医薬品は各国の医薬品管理当局からその名称と物性、効能などが承認されて市場に出されます。現在の日本では、生薬の混合物から成る漢方製剤については政府から承認された効能がありますが、個々の生薬では一部を除き政府から承認された効能がありません。生薬学の教科書には個々の生薬の効能は記載されていますが、その内容は著者によって差があります。そのような状態でも個々の生薬の効能が薬剤師国家試験で出題されていたことから、使用した教科書によって正答率が異なる可能性があるのは問題であると考えました。そこで、日本の伝統医学である漢方医学が独自に発展を始めた江戸時代から2015年まで、日本で出版された本草書、教科書に

記載された生薬の効能に関する記述をレビューし、江戸時代と、明治時代以降では漢方医学、西洋医学、それぞれの用語での効能ごとで多数決してまとめることにより、個々の生薬の効能の標準化案を提示する論文を発表しました。その結果、中医学にはない日本独自の生薬の効能が得られるなど、新たな知見もありました。

私は2024年現在52歳で、研究奨励されるにはだいぶ年を取ってしまったのですが、生薬の利用は歴史が長い分、生薬学と薬史学とは切り離せない関係にありますので、今後もこのような仕事も続けて行ければと思っています。ご指導のほど、どうぞよろしく申し上げます。

- 1) Liu Y, Makino T, et al. Front. Pharmacol. 13: 892732, 2022.
- 2) 矢作忠弘, 牧野利明, 他. 日本生薬学雑誌, 71:1-19, 2017.
- 3) 牧野利明, 他. 日本東洋医学雑誌, 73:146-175, 2022.

日本薬史学会特別賞を受賞して

内藤記念くすり博物館 稲垣裕美

このたびは特別賞を賜り、厚く御礼申し上げます。授賞理由に「内藤記念くすり博物館における企画展の企画・運営並びに薬史研究」とあります通り、私だけではなく、歴代館長や学芸員、薬草園ほか全員のこれまでの取り組みが評価いただけたものと大変嬉しく存じます。

当館における展覧会は1971年(昭和46)の開館以来の歴史があります。かつては日本医学会総会における「天然痘ゼロへの道」展など、研究者のご監修の下、大きな団体との共催や展示場所の提供が中心でした。

1984年(昭和59)の展示館完成後は、2階企画展示室にて館独自の企画展を開催するに至りました。当時はお手本になるような医薬史の展覧会がまだ少なく、まずは収蔵資料をテーマ毎にまとめて紹介する形で企画展を始めました。自分たちで展示物の選定や訴求点を考えるのは大変でしたが、当時の青木允夫館長にご指導いただき、豊富な資料や図書を元に展示プランを練り上げました。

図録制作は1994年(平成6)に開始しました。『くすり博物館だより』で簡単に紹介するのは異なり、和装本を含む医薬史の文献を四苦八苦しながらか

で原稿を執筆しながら今日に至っています。

森田宏館長の就任以降は、テーマにがんや認知症、感染症に創薬と、役に立つ現代の情報を盛り込んだ企画展が増えました。来館者の皆様に新たな気づきを得ていただけるのではないかと考えております。

薬史研究については、もっぱら研究者の皆様の調査等のお手伝いを中心に、私自身は展示や図録、問い合わせの対応という形で成果発表をさせていただ

いてきました。近年は柴田フォーラム等で講演させていただく等、これまで想像し得なかった発表機会を賜り、ありがたく存じております。

時代がデジタルの潮流になったとしても、“博物館行き”の資料や図書は変わらず必要なものと信じております。まだまだ取り組みたい調べものも多く、今後も引き続きご指導下さいますようお願い申し上げます。

日本薬史学会優秀発表賞を受賞して

近畿大学 高浦 佳代子

このたび、日本薬史学会2023年会にて優秀発表賞を賜りました。ご投票、ご選出頂きました先生方に心より御礼申し上げます。

私自身は高校で日本史を履修していたくらいで、歴史の専門的な教育を受けたわけではありません。その上で、歴史研究に踏み込むにあたり、私は常々「理系だからこそできる研究を行う」ことを心がけております。今回、賞を頂きました研究内容につきましては、『緒方洪庵全集』の執筆作業が深く関わっております。主に薬物が関係する著作について担当させていただきましたのですが、こちらの全集ではいわゆる底本の選出からすべてを担当することになっておりました。底本というのは、ある著作に対する写本や版などが複数あるときのベースにする史料を指します。文系の世界では、本人が書いたものにかに近いかや情報量などを総合的に判断して決定されるようですが、これを理系が行うとしたらどのような

方法がよいだろう？というのが着想の1つのきっかけでした。

「理系だからこそできる研究」として、一番シンプルなのは「数値化を行うこと」だと考えています。数字にしてしまえば、数学・統計学での処理も可能になります。今回扱った史料は処方集ですので、①登場する生薬を、生薬学の知識を駆使して正確に同定・分類し、②それぞれの生薬に数字を割り付け、③統計的に解析を行うという3つの「理系だからできる」ステップを踏むことで、どの写本同士が類似しているかをビジュアル的に表現することができました。

数字を使って客観化できるというのは理系的な手法の大きなメリットです。また、言語の壁を超え、海外に発信するにも適しています。これからも、このような「理系だからこそ」の手法を駆使して、薬史学という研究領域が若手研究者にとっても魅力的な分野になるよう、試行錯誤していきたいと考えております。

中部支部だより

令和6年度 日本薬史学会中部支部例会開催

中部支部長 河村典久

今年度の例会を下記のとおり開催しました。

記

今回は、名古屋駅近くの『ウインクあいち』にて開催を計画しました(詳細は学会 HP参照)。

日時：令和7年2月15日(土曜日)
午後1時30分～4時50分

場 所：『ウインクあいち』11階1106
アクセス：名古屋駅桜通り口から5分、『ミットラ
ンドスクエアビル』の裏(東)

議 題：・奥田先生逝去の回想
・帝京大学での薬史学会2024年会の報告

講演会：

演題①：「澤野医院記念館に残された医薬品・医療
器具」

○桐原 正之、小栗 勝也(静岡理科大学)

演題②：「薬学史研究者 奥田潤の見たインド」

○夏目 葉子(日本薬史学会会員)

演題③：「生薬の効能別分類法の歴史」

○牧野 利明(名古屋市立大学大学院薬学研究科
生薬学分野)

事務局：中部支部

名城大学薬学部 飯田耕太郎

西欧薬史学補講(5)

辰野美紀

No.93の西欧薬史学補講(4)。省略

本来の内容

1. Friedlich II の医薬法(3) 45条、47条の翻訳
2. Friedlich II のアルフィー法全般の内容

その傾向について

ラテン語翻訳について

No.94

薬学史入門 p.41 修道院の薬草園の追加補講を以下
に記したい。

1. Hildegard (1098-1179) の生涯

西南ドイツの貴族の娘に生まれた Hildegard (ヒルデガルト)は若くして病弱であり、長く修道院に暮らしていたが、中年になって神の啓示を受けてから、様々な病いの治療法を自動筆記し、それを3種の著作として纏めた。

自動書記(p.41)または自動筆記とは... 自分にまるで別の存在が(例えば、神など)乗り移ったように、無意識に語ったり文章を書いたりすることをいう。Hildegard の場合は、彼女が修道士フェルマールにまず語り、それを彼が書き留め、彼女が語った薬草名(ギリシャ語)や治療法についても、フェルマールが全てラテン語に翻訳し纏めて Hildegard の著作として刊行したものである。それ以前に、Hildegard は修道院での教育として自由7科、詩編、教会音楽の作曲などを学んでいたらしい。しかし、彼女は特



参照文献③の扉絵 左下角の図が Hildegard

別な専門教育は受けていないとされている。

2. 著作から見る Hildegard の治療概念…

以下 A から E の古代理論を応用しての血液バランスを回復させることを主眼とする方法であるが、より簡潔に病いと薬草などの特徴を、温・冷と乾・湿との組み合わせから分類した体液病理説を採用

し、その血液・体液バランスの偏りを是正することで治療しようとする方法をとっていた。

- A. 宇宙のマクロコスモスと人体のミクロコスモスの呼応
- B. 大プリニウスの宇宙の組成… 4 組成 (火、水、木、土)
- C. ヒポクラテスの血液論… 4 体液説 (血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁)
- D. ガレノスの血液生理学… 4 気質説 (血液気質・粘液気質・黄胆汁気質・黒胆汁気質)
- E. 表徴理論… 古代からの論理 (参照：薬学史入門、p.40、錬金術) であり、「薬草の作用は、その薬草の表層の形態と類似しているという思想である。たとえば、見た目が目の形に似て見える薬草は目の病気に効くという判断がされた。」更に、大槻真一郎によると参照文献① p.234. において次のように言及している。表徴理論は後の時代のパラケルスス (1493-1541) が特徴表示説 (Signaturenlehre) と称しており、「特徴表示説とは、どうしてこの薬剤にはこういう効能があるかを説明するときに使われる理論。形態・色などの外的な特徴にあらわれているとされます。従って効能を知るためには、自然物の外的な特徴を解釈する必要が出て来ます。」

(参照文献①：元明治薬科大学名誉教授 大槻真一郎著、元明治薬科大学非常勤講師澤元互編、『西洋本草書の世界—ディオスコリデスからルネサンスへ』、編者あとがき、p.254、2021年刊)

E の表徴理論の例：クルミ (胡桃) と脳疾患

クルミの形態が人間の脳に類似しているため、脳の病いに効能があるという予想を立てて、クルミを脳の治療に用いること。

(参照文献②：『Hildegard のハーブ療法 修道院の薬草 90 種と症状別アドバイス』、ハイデローレ・クルーゲ著、相澤裕子訳、豊泉真知子監修、p.36、2010年、フレグランスジャーナル社)

3. Hildegard の著作

3. Hildegard von Bingen の Heilkunde としての著作

・ Grund und Wesen von St. Hildegard… 『スキヴィア (Scivias) 道を知れ』 cf. Hildegard von Bingen, Literatur Verzeichnis, 『Wisse die Wege (Scivias)』, Otto Mueller Verlag (Salzburg)

・ Heilung von Krankheiten… 『原因と治療 (Causae et Curae)』

全てが Hildegard の原著のものかは不明。後の時代に書き加えられたのか、写本を作る時に幾つか追加された可能性もあり得ると言われている。

・ Physica… 『自然学フィジカ (Physica)』

Physica は Hildegard の死後、編集されたもの。

(参照文献③：Hildegard von Bingen Heilkunde, Das Buch von dem Grund und Wesen und Heilung der Krankheiten, nach den Quellen uebersetzt und erklautert von Heinlich Schipperges, Druge : Waldheim Wien XII, Otto Mueller Verlag, Salzburg)

4. 著作に見る治療例…

Hildegard は、草木やハーブなど植物のみならず動物・鉱物・宝石などによる治療法を著作の中に記している。それらの中でいくつかの植物療法の例を挙げてみたい。

a. 参照文献① p.173 のスペルス小麦についての記述

Hildegard 著作の physica の植物の章の 1 ページに小麦が載せられている。彼女が語るところによると、「スペルス小麦は穀物の中でも最良で、の最高の脂肪分を含み、体を温め栄養が豊富である。」「心身をなごませ、血や肉を整え、楽しさと喜びを与え、健康に良い食物」と記している。頭部の血行障害、背中の痛み (湿布)、犬などにかまれた傷に処方している。

b. 参考文献① p.175 の甘草についての記述

「甘草は穏やかに体を温め、食べると声が澄み」、「目も明るくなり、胃の消化も助けてくれる。激しい怒りを消し去り」、感情・精神的にも役立つ素晴らしい薬草である。

c. 参照文献②の p.35のクルミについての記述

p.36 「胡桃の木は早くからその価値を評価していたローマ人によって、アジアから中央ヨーロッパへ持ち込まれたとされ」「発掘品によると、胡桃はまずギリシャ人によってイタリアへ、ローマ人によってアルプス以北のオーストリア、南ドイツなどに持ち込まれたことを示している。」という。「すでに古代ギリシャ人は、胡桃に不思議な力を認め」「体が弱った子供や骨折した老人に定期的に胡桃を食べさせると」驚異的な回復がのぞまれることも記述されている。更に、集中力を高め、脳の活動を活性化するといわれており、これは「パラケルススの象形薬能論が証明していよう。」「Hildegard は、胡桃を痛風、ハンセン病などの皮膚病、頭部膿か湿疹、寄生虫といった症状の治療に勧めている。」

フランク王国のカール大帝が皇帝庭園に胡桃の木を植えるように指示したことから、中世には特に南ドイツで急速に広まったと考えられる。

5. まとめ

A. Hildegard の独自理論…

1. 自分自身病身であったことから Hildegard の

日々の体験から実感することを治療法として話している。

2. 個々の患者への対応と調整を重視した。例えば、患者が住んでいるドイツの気候を考慮してその血液バランスの治療法を変えている。
3. 特に、黒胆汁症(メランコリア)を精神的な病でなく、身体的な病ととらえ、治療法については丁寧な助言を加えている。

B. 十字軍の時代(1096~) …

地中海沿岸地方に比べてドイツでは、植生が豊富ではなかったが、十字軍の派遣によって、時代的にドイツでは知られていなかったいくつかの治療法や治療薬とスパイスが応用されている可能性がある。

C. アラビア科学の受容、錬金術の知識…

小アジアへの巡礼の流行、修道院での古代書籍の写本の現況、そこからの情報教育

D. 神聖ローマ皇帝フリードリッヒ I世(バルバロッサ)の支持と支援

E. 法王の認可

F. ベディクト派の方針

G. キリスト教世界と現実世界の王などの共通認識による広がり

六史学会参加報告

会長 船山信次

今年度は以下の要領(プログラムは日本薬史学会HP参照)で開催され、日本薬史学会からは、津谷喜一郎名誉会員、船山信次会長、五位野政彦理事、小曾戸洋理事、鈴木達彦理事、柳澤波香理事、桐原正之評議員、牧純評議員、発表者でもある森本和滋監事の対面参加があった。参加者は対面では42名であった。

発表会終了後、夜景の見える同大学の建物の最上

階にて行われた懇親会(18~20時、会費5000円)に対面参加者のほとんどの39名が参加、懇親会の席上、日本薬史学会を代表して船山が新しく出来た学会案内のパンフレットを紹介しながら挨拶した。

・開催日時：2024年12月14日(土) 14~18時

・会場：二松学舎大学 九段1号館5階507教室
(対面)とオンライン

演題(発表順)

- ・洋学史学会：小澤 健志：17世紀に西洋で出版された医学書に紹介された日本人
- ・日本医史学会：百瀬 祐：杏雨書屋の古地図について—アロウスミス方図と新訂万国全図を中心に—
- ・日本薬史学会：森本 和滋：日本薬史学会創立七十周年記念号(薬史学雑誌)の刊行を感謝して

- ・日本獣医史学会：中山 裕之：日本における動物病理解剖症例の変遷—明治から令和における動物の病気の移り変わり—
- ・日本歯科医史学会：永藤 欣久：近代女性歯科医師の養成
- ・日本看護歴史学会：野口 理恵：愛徳姉妹会の戦時救護—クリミア戦争に赴いた人物の記録を手がかりに

日本薬史学会創立七十周年記念号の刊行を感謝して

日本薬史学会 70周年実行委員長 森本和滋

はじめに

松本和男60周年記念委員長から「オーファンドラッグ・オーファンデバイスの開発振興20周年を迎えて」を読みました。60周年記念号に入れても良かったと思いました」とのお言葉、2019年8月下旬山田光男名誉会員から1時間余の電話、第44回 ICHP（国際薬史学会）への激励と「5年後の70周年記念事業宜しく」とのお言葉。70周年への思いに、種を蒔いて頂きました。



1. 70周年記念号の刊行

2024年6月30日、薬史学雑誌 Vol.59, No.1として刊行された。

2. 記念号の目玉：座談会の設定

1) 吉野敬子実行副委員長により下記の手順で開催された¹⁾。

座談会開催概要

開催日時：2023年8月22日 14:00～15:50

開催方法：オンライン(Zoom使用)

開催支援：INFOSTA事務局

Rimo Voice

座談会の内容を正確に記録し、後日の参照や学会誌への掲載を容易にするため、自動話者分離技術を活用した文字起こし、共同編集及び校正の支援を提供した。

2) 座談会の内容²⁾

- (1) 参加メンバーと薬史学会との関わり、
- (2) 薬学と薬剤師のこの10年、
- (3) 薬史学会のこの10年、
- (4) 薬史学と薬史学会のこれからの10年。

3) 奥田潤名誉会員からのフィードバック

9月12日にお手紙を頂いた。「ベオグレードで無事発表を成功され何よりでした。70周年記念誌、座談会の記事 p.8～13を何回か読み直しました。薬学は化学が出発点としても患者のための医療薬学と分離しては薬学にとって好ましいことではありません。薬学は1つであって欲しいと思ってます。座談会の最後に、女性薬剤師のことが書かれてました。今後の女性会員の活躍を期待したいと思います」。

3. 3つの論文

1) “Reflections on the role of the Japanese pharmacist during COVID-19: Lessons from the history of pharmacy” (和訳付)と題するエッセイ 46th ICHP ベオグレード

Julia Yongue 国際委員発表

2) 「日本医薬品産業現代史(2010～2020)総論ーマルチモダリティ化が医療イノベーションに貢献した10年ー」

田村浩司、榊原統子、松本和男

60周年記念号(医薬品産業現代史(1980～2010)の
続報

3) 「日本の薬剤師の立ち位置と役割の変遷～明治から現在までの150年史～」

武立啓子、赤木佳寿子 東京年会・武立書記発表

4. 打ち上げ会

7月20日東京駅の近くのレストランで行われた。

実行委員会メンバー（森本委員長、吉野副委員長、武立啓子書記、折原裕・榊原統子・松本和男・森田宏・Julia Yongue各委員、齋藤充生協力連携委員、船山信次オブザーバー）をはじめ多くの方々のご協力を頂いた。

5. 46th ICHP at Belgrade (2024/9/4-7)

記念号の会長挨拶別刷を持参し、祝辞を頂いたISHP会長 Halil、事務局長 Dusanka を始め関係者に謹呈した。

6. 日本薬史学会 2024 年会 (2024/11/2)

厚味巖一年会長に「70周年の節目となる2024年会を帝京大学板橋キャンパスにて開催できることは、2024年会長として心より御礼申し上げます。年会のテーマは、板橋に因んで“未来へと橋を渡す。”としました。特別講演、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表、ランチョンセミナーと盛りだくさんの内容を用意しております」との挨拶を頂いた。

1) 樋野興夫(順天堂大学名誉教授)公開特別講演会

「がん患者を支えるために～がん哲学外来から」のタイトルで『がん患者は、がんとともに生きていく上で人とつながり、尊厳をもって生きることが求めている。「がん哲学外来」で大切な要素は、「暇気な風貌」と「偉大なるお節介」である。「暇気な風貌」とは、忙しくてもそのことを表に出さず、心温まるおもてなしと賢明な寛容性で患者と対話できる資質である。

また、「偉大なるお節介」とは、その人に関心

を持ち、苦悩や気掛かりに耳を傾け共感すること、すなわち他人の必要に共感することである』。

演者が座長を務め、45分講演、15分間質疑がもたれた。帝京大学病院のがん患者も参加された。

2) 薬事日報新年号 (2024/1) ³⁾

西川隆名誉会員から「日本薬史学会誕生の時代的背景創立70周年「過去は未来への序章」を貫くは、初の実験を伴わない発表・「非実験系」として育てる・雑誌、年会、フォーラム、講演会が学会の「顔」・大学で薬史学の教育を!」の提示。25名が執筆した「薬学史入門」2022年刊行された。

おわりに

山田先生は、2021年7月95歳で逝去された。奥田先生は、2024年10月19日95歳で逝去された。お二人とも薬史学に深い研究心を抱き、薬史学雑誌に多くの論文を遺された。二人の使命感と責任感には敬意を表するとともに、ご厚情に感謝し、ご冥福を祈ります。

本記念号は、経費削減を目的として、単独発刊ではなく、合本とさせて頂いた。「近未来日本における少子高齢化、総人口減少問題と薬局薬剤師に期待される役割」は、奥田先生の最期の論文となりました。

刊行には、(一財)学会誌刊行センター・館内航氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

参考文献

- 1) 吉野敬子、情報の科学と技術 74巻7号、278～279 (2024)
- 2) 記念座談会。この10年を振り返り、そしてこれから10年を思う。薬史学雑誌59 (1)、8-13 (2024)
- 3) 西川隆。日本本薬史学会誕生の時代的背景創立70周年、薬事日報 2024/1/1 発行

第46回 ICHP (国際薬史学会) 報告

監事 森本和滋

9月4日午後 Extended Executive Committee に、夏目葉子評議員と出席した。100周年は、2026年9月にインスブルックで開催することが決まった。

また、会長の Halil Tekiner より、“the International day on history of pharmacy on August 18th” に同年から実施したいとの提案も出され協議した。

ポスター発表は、5日昼に行われ、高際麻奈未会員が発表した。

6日午前夏目氏が発表、会場は“Yohko”と人気で、最後のスライドで、“2014年 ISHP のグラントを頂き、その感謝で、現在まで研究を続けてこられている」との言葉に感銘を受けた。

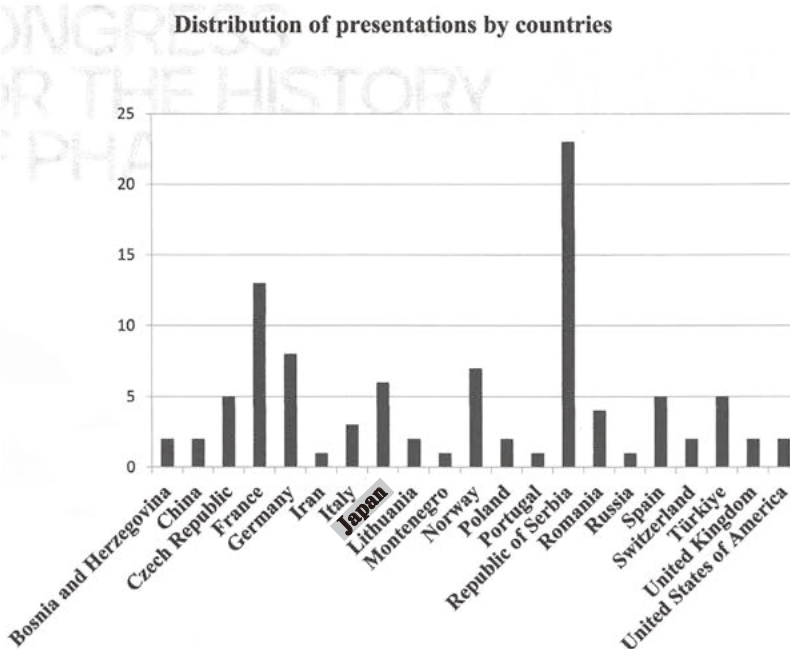
夕方には、ジュリア・ヨング理事と森本が、同時に別会場で口頭発表した。ヨング国際委員は、70周年記念号のエッセイの内容を発表され、「新鮮な内容で、日本の薬史をもっと学びたい」聴衆の反響を聞いた。

筆者は、15分の発表後、年会長の Dusanka Krajnovic が、「長年の倫理教材開発素晴らしいです。学生さんの反響は？」との質問を頂いた。最終日の総会で、「素晴らしい発表をされた方は、是非 end of September までに ISHP のジャーナル・Pharmaceutical Historian に投稿を」とアピール。

筆者は、9月24日編集部に掲載、Stuart Anderson 編集委員長より、「Peer review に回すから2週間待ってください」、10月29日再投稿、受理、校正。

何と Vol 55, No.1 Mach 2025 に「掲載が決定。夢のような2カ月！

7日午前には、高浦佳代子評議員が口頭発表、2024の ISHP グラントを授与された研究成果の発表。森本が座長を務めた。



*The participating countries are listed in alphabetical order

最終日に、ポスター賞の発表があり、高際氏が第2位に選抜された。

今回の発表数は、グラフで示したように、我が国は、六演題と大変健闘した(棒グラフ)。

我が国でも ICH で馴染みの深い Dr. Angeles ARTIGES (Former Director of European Directorate) が素晴らしい特別講演をされ、コメントもさせて頂いた。彼女のような女性が、洗練と活躍されている姿を見かけたことが特に印象に残った(座長の後、彼女とショット)。



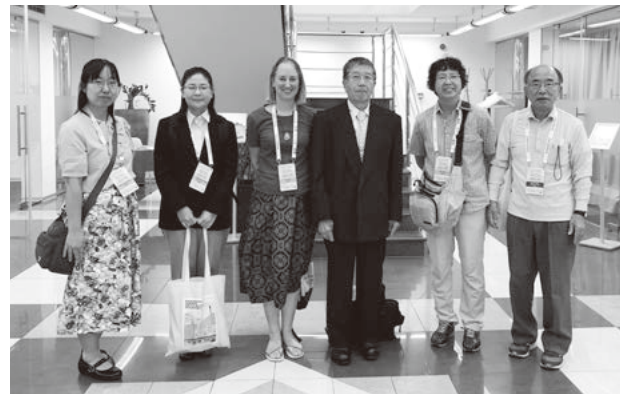
2024年9月4日から7日にかけての4日間、第46回国際薬史学会(ICHP)がセルビア共和国の首都ベオグラードで開催されました。私自身は国際薬史学会には参加したことがなく、またセルビアというあまり旅行先としてメジャーではない国での開催ということもあって、多くの不安を抱えての参加となりました。

いざ到着してみると、町ではどこでも英語が通じるという印象で、移動や現地での生活に大きな不便は感じませんでした。会場は Envoy Conference center という建物で、吹き抜けでつながった1階と地階が会場となっていました。この会場と同じ建物だと思って Envoy Hotel を予約していたのですが、実は徒歩10分ほど離れた場所であるということをチェックイン後に知ることとなりました(同様の勘違いをしていた参加者は多かったようです)。

私自身は、口頭で応募した演題とは別で、最終日の午前中に開かれた General Assembly で前年に採択頂いたグラント(ISHP Research Grant 2023/2024)に関する報告をする予定になっていました。直前になって、事前に送ったはずのスライドが事務局のPCに入っていないことが発覚し、アドリブかつスライド無しで話をするようになってしまい、心臓が飛び出る思いでした。正直自分でも何を話したのかあまり覚えておらず、大変お見苦しい姿をお見せしたのではと反省しております。何事も、事前

の確認が重要だということを知り学会となりました。そのあと3つの小部屋に分かれて行われた口頭発表のセッションでは自らの演題も発表させていただきましたが、座長が森本先生であったこともあり、ある程度落ち着いて発表することができました。

今回は初めての参加ということで、日本から参加された諸先生以外にお話しできる相手がいなかったことを不安に思っておりましたが、実際にはポルトガルの Maria G. Semedo博士、ルーマニアの Ana-Maria Atănăsoie博士、ドイツの Maresca Köster博士といった若手女性研究者の方々に話しかけて頂き、お互いの国での薬史学やその教育について語り合う機会を得ました。次回はオーストリアのインスブルックで開催されるとのこと、再会を約束した先生方にお会いするためにも、研究に動しもうと思います。



ヨング先生より



高浦発表風景



最終日集合写真(学会事務局より)

「海外の薬史学会の今(14)」ドイツ

国際委員会 孫一善

2023年、2年に一度行われるドイツ薬史学会(DGGP)ビエンナーレが「薬と中毒の歴史と展望」(Medicines and addiction – History and Outlook)というテーマでニュルンベルク(Nuremberg)で開催された。ビエンナーレでは中毒予防と薬物乱用の対処方法と内容の面でこのテーマと関連する多様なアプローチが紹介された(詳しい内容は ISHP Newsletter 25, 2024, 29-31頁を参照)。プログラムでは Dr. Sara Ruppen (Zurich)による「16世紀ドイツにおけるアルコール取引の公的規制」に関する講義のほか、多数の講義が行われた。発表された講演は、Prof. Dr. Christoph Friedrich (DGGP)によって出版される予定である。講演に続き、科学的なポスターの発表とポスター表彰式も行われた。

ニュルンベルクでの薬史学会には多くの参加者があり、多様な講演とプログラム及びイベントが行

われた。旧市街の歴史的ツアー、聖書博物館の訪問、ゲルマン国立博物館のツアーの提供も豊かな薬学の歴史をもつニュルンベルクへの理解を深めた。DGGP理事会では、Dr. Susanne Landgraf を会長に、Dr. Bernhard Müller を副会長に任命した。

10月7日、ドイツ薬学協会(DPhG)年次大会における薬学史部門のプレシンポジウムが、「テュービンゲン(Tübingen)の薬学」というテーマでTübingenで開催された。このプレシンポジウムはDGGPのBaden及びWürttemberg支部のメンバーに秋季学術大会として機能している。2023年には、DGGPの18支部グループでも多数の科学イベントが開催された。DGGP会員による多数の学術的成果や地域イベントはドイツ薬剤師新聞(German Pharmacist Newspaper)と医薬品業界紙(Pharmaceutical Newspaper)に掲載された。

東京大学薬学図書館展示見学記

齋藤充生

東京大学薬学図書館では、「薬史学文庫の設置とその意義 – 日本薬史学会創立70周年を記念して –」(1/24-3/25)を開催しています。資料は下記HPからも入手できます。今回の展示は、本学会の創立・発展に尽力された方々の著作を、薬史学文庫から出品しており、著作からはその人柄を感じられます。初日の午前中に訪問しましたが、西川名誉会員、小清水理事も来訪しており、図書館員の飯野評議員に解説していただきました。書籍に加え、根本氏がご自身で図書館にお持ちになった日薬新聞連載の草薬太平記の切り抜き、薬史レター 92号で紹介された鳥越氏の「正倉院薬物を取り巻く世界」も展示されています。

今回の展示資料も、(公財)嶋記念大学図書館振興

財団の助成を受け、(株)資料保存器材による修復を施されているとのことで、学会からの寄贈後、このような良好な状態で保管管理いただき、貴重な資料を後世に伝え、広めるという図書館の使命を果たされている東大薬学図書館および支えていただいている関係者の皆様に改めて感謝の念を抱きました。今後も引き続き学会寄贈図書等の移管を予定していますが、安心してお任せできます。薬史学文庫は書庫からの出納の手続きが必要ですが、自由に閲覧できる閲覧室の開架書架にも社史、退官記念講演資料などが収蔵されていますので、合わせてご見学ください。

<https://www.lib.f.u-tokyo.ac.jp/>

〔Book紹介〕

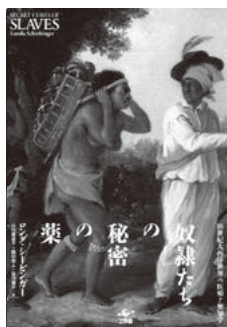
ロンダ・シービンガー 著 小川眞里子、鶴田想人、並河葉子 訳

「奴隷たちの秘密の薬」

A 5判 368頁 4,500円+税(工作舎 2024年9月30日発売)

ISBN 978-4-87502-568-9

著者であるロンダ・シービンガーは、アメリカ合衆国の女性科学史家であり、科学技術史におけるジェンダー研究の第一人者である。「科学、医学、工学、環境学分野における「ジェンダード・イノベーション」プロジェクト創設者であり、スタンフォード大学歴史学科ジョン・L・ハインズ科学史の教授でもある。本書は、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのアフリカ、ヨーロッパ、アメリカ大陸における医療知識とジェンダー、奴隷制度、人種主義の関係を分析している。本書は、シービンガーの一連の著作の翻訳を手がけてきた日本の科学史家たちによる作品であり、彼らは、「知の世界における無知」という概念に着目しつつ翻訳をしている。内容は、西インド諸島(カリブ海地域)の植民地において、植物を使いこなし、独自の治療法を編み出した奴隷や先住民、彼らの医療知識を評価する一方で、その秘密を開示させようとするヨーロッパ人医師たち。彼らと奴隷との知をめぐる交流と葛藤、搾取と抵抗の相互関係を分析している。本書は全5章からなる。第1章では科学的医学の台頭、第2章では「黒人医師」の薬物学実験、第3章では医



療倫理、第4章では搾取的な実験、第5章では植民地という垣塙、そして終章では知の循環がまとめられている。本書には、社会学の概念や専門用語が多く見られる。薬物にまつわる事象を捉える薬学史研究とは、対象地域・群、薬物、病気の分類、比較分析や検証における科学的証拠の挙げ方や結論への導き方が異なる。また、著者が調査や執筆において薬用植物の同定に用いた文献も少ない。しかし、薬物動態や代謝といった概念のない時代において最高の民族薬理学研究が実践されていたことがわかる。したがって、本書は、近代医学と西インド諸島の植民地における土着の医療との複合体が存在したことを証明している。また、本当に人類にとって大切な知識ならば、発見されていないだけであり、フィールドワークをすれば、表現型や使用する薬用植物を変えつつも現代まで口述伝承されていることが判明する可能性もある。著者の「知の循環」という発想は、近未来の創薬におけるアイデアターゲットを見つけだす「探索研究」に生かされることだろう。つまり本書は植民地下での医療を起点に、政治や経済に翻弄された植民地医療の本質と問題点を描き出し、なぜそうなったのかを教えてくれる貴重な文献調査研究の集大成である。

(夏目葉子)

〔Book紹介〕

大前晋 (編)

笠原嘉の「小精神療法」小史：「苦悩する者への愛ないしは畏敬」から「病後の生活史」へ

四六判 268頁 3,300円(金剛出版 2024年6月24日発売)

ISBN 978-4772420471

戦後から70年余り、95歳になるまで精神科診療を続け、外来の診療時間に限りがある日本の保険診療の範囲で続けられる「小精神科療法」を編み出した

インタビューに対し、平成から30年の診療歴のインタビューアが、研究状況、時代背景、臨床の推移について、縦横無尽に語り合う。一見、穏やかな

対話のようであるが、豊富な参考資料で示されるように、インタビュアーは原資料を渉猟し、大量のドイツ語、英語文献を事前に読み込み、咀嚼した上で、さりげなく引き出す質問をし、インタビューはそれに対する確に答えるさまは、まさに真剣勝負の対局である。随所に配置された消しゴム版画による慈愛に満ちた似顔絵は、そのような緊張感を和らげ、対話で語られる関係者の人



柄を一目で表す工夫であろう。時代背景として、三環系抗うつ薬の登場があり、治療だけでなく、疾患の鑑別や疾患概念・学問の方向性にも影響したことが、生の声で記録されている。論文が図書館に限られた時代、思わぬ交流の場となっていたこともエピソードにより示されている。

単なる聞き語りや座談会ではなく、世代を超え十分に準備された対話は、精神科医療史の範囲にとどまらず、歴史を記録するための研究手法として、本学会でも参考とすべきものと考えられる。

(齋藤充生)

薬史レター投稿のヒント

薬史に関する「短編」の事項および言葉について

薬史の古代、中世、近現代史に関する断片的な事柄や薬の言葉に関するもの

薬学教育および研究に関する話題

薬学教育に携わる人物の話題。研究に関する興味ある事項の紹介など。

医薬の「科学技術」に関するもの

製薬技術についての話題。医薬の製剤器具、調剤器材、天秤、秤量容器、蒸留機器、測定機器など。および医薬品産業における話題。医薬品産業の歴史と製薬技術史に関する話題。

医療に関する事項。「病院および薬局の職能と薬剤師業務」に関する話題。

歴史的に異色のある病院薬局および街の薬局における薬剤師の職能活動に関する話題。

医療における薬剤師の職能の変化の話題。

薬史に関する「文芸、美術」などに関するもの

文学、和歌、俳句、川柳などに出てくる医薬に関係するもの。医療に関する絵画と美術工芸品、薬草図譜、薬の容器、薬局のマーク、広告資料などに関する話題。

薬史に関連する「博物館、史料館」などの紹介

薬史に関連する史蹟および事績などの紹介または見学印象記など。

薬史の「図書」の紹介および書評

医薬に関連する図書の読後の感想などについて

上記以外の「その他」の薬史に関係するものについての紹介

訃報

2024年12月初め、ご家族より、本学会理事で、2023年会(岡山)の年会長を務められた土岐隆信先生(マスカット薬局顧問、元岡山県立岡山病院薬剤科長、昭和18年生まれ)が逝去されたことのご連絡がありました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

『日薬新聞』連載の根本曾代子「草楽太平記」「剤界風雲録」の原本発見

評議員 飯野洋一

根本曾代子先生は近代日本薬学を築いた先覚者たちの評伝を多数刊行し、『薬史学雑誌』『薬局』『ファルマシア』『Chemical times』に近代日本薬学の先駆者、薬学ゆかりの外国人の史伝を数多く執筆した。また、『東京大学薬学部前史』で東京大学から薬学博士の学位が授与され、日本薬史学会幹事として多年に亘り意欲的な活動を行い、平成2(1990)年4月、日本薬史学会名誉会員に推薦された。

平成8(1996)年9月22日、92歳で逝去したが、その数ヶ月前のある日のことである。熱海在住の根本先生はいつもの和服姿で東京都文京区本郷の東京大学薬学図書館を訪れ、かつて『日薬新聞』に連載した「草楽太平記」の「柴田承桂先生の巻」「長井長義先生の巻」「下山順一郎先生の巻」「丹波敬三先生の巻」と「剤界風雲録：丹羽藤吉郎先生」の新聞切り抜きを寄贈された。

薬学図書館では新聞切り抜きを合綴した原本を電子複写・製本し、蔵書として受入したが、長い間原本が行方不明であった。ところが、寄贈以来約30年の時を経て、昨年11月に薬学図書館5階書庫の一隅で新聞切り抜きを合綴した原本を発見し、薬史学文庫の蔵書として受入した。その詩情溢れる筆致と静謐な墨絵の挿画は画文一致の名品であり、原本ならではの鮮やかな風趣がある。

柴田承桂、長井長義、下山順一郎、丹波敬三、丹羽藤吉郎は近代日本薬学の創始者たちであ

る。ドイツ留学で習得した学識に基づき、真摯な努力を傾注し、薬学教育の基礎を構築し、薬事制度の創設に貢献し、近代薬学の黎明期を築き上げた。

柴田承桂はドイツ留学中、岩倉使節団で渡欧中の長与専齋と出会い、深い信頼関係を結び、長与の懇請により東京医学校製薬学科初代教授に就任した。下山順一郎、丹波敬三、丹羽藤吉郎は柴田の薫陶を受けた東京大学医学部製薬学科の第1回卒業生で師弟の深い情誼は終生変わらなかった。長井長義は13年に及ぶドイツ留学で研鑽を積み、「日本薬学の父」と呼ばれた。日本薬学会初代会頭就任も名利に恬淡な盟友の柴田の推挙によるもので、昭和4年(1929年)の逝去まで42年間会頭を務めた。

明治維新から150年以上が過ぎ、明治は遙か彼方の遠景となったが、去り行く時の流れにも消えぬ一筋の足跡がある。この度の原本発見を契機に近代日本薬学史研究が促進されることを望んでやまない。

参考資料

佐藤佳年子。日本の薬学の恩人達。薬学図書館1996;41(3):303-304

山田光男。根本曾代子先生を偲んで。ケミカルタイムズ。1997;1997(2):2

日本薬史学会編集委員会

編集委員長:齋藤 充生

編集委員:赤木 佳寿子 武立 啓子 牧 純

薬史レター 第94号 2025年3月

編集人:齋藤 充生 発行人:船山 信次

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (一財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/>

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください